ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵
黒川真頼詠・同春村評『もゝちとり』解題

香山　キミ子

一

「黒川文庫」は江戸の国学者黒川春村、その養子真頼、孫真道が三代に亘って家学を伝えた黒川家の蔵書である。和歌関係の書籍約一〇〇〇点三〇〇〇余冊を、ノートルダム清心女子大学附属図書館が蔵している。二代目当主黒川真頼の歌稿である『もゝちとり』を翻刻し、これまでに三回に亘り発表した。（『清心語文』第一二号～第一四号所載）今回は、真頼及び師黒川春村の生い立ち、『もゝちとり』（注1）の書誌、春村書入れの評語、習学期における真頼はどのような歌をよんだか、また師の春村はどのように指導したかなどについて考察しまとめていく。春村の書入れについての考察は、紙面の都合上次回に稿を改めることとする。

まず真頼の生い立ちについて述べる。真頼（一八二九―一九〇二）は文政一二（一八二九）年、上野国山田桐生町（群馬県桐生市）の機業家、金子吉右衛門の子として生まれる。幼名嘉吉、通称寛長、後に真頼と改め、号は荻斎・万里・墨水。幼少の頃より学問を好み、天保一二（一八四一）年、一三歳で黒川春村に入門して、国語・国文・音韻・和歌を学んだ。習学期の真頼がどのように和歌を学んだかをみる上で興味深い記録がある。年譜（注2）によると、天保六（一八三五）年七歳の夏の夜、祖母に添い寝されて初めて、

夕立やしのをたばねてふる雨にかすかにきこゆ馬方のこゑ

と和歌をよんで両親を驚かせたとある。真頼は、一七歳頃から和歌を春村に師事しているが、弘化二（一八四五）年、一七歳の冬には、寒夜一か月に『草野集』（注3）全部の歌題（題数約七〇〇〇題）をよみ遂げている。一か月に七〇〇〇首近い和歌

をよむことは並大抵のことではなく、驚異的でさえある。この頃和歌及び古典のことを師である春村に問い、勉学に励む。弘化四（一八四七）年、一九歳で『三代集拾玉抄』三巻を撰し、翌年の嘉永元（一八四八）年八月『新勅撰愚考』を著述して春村に一覧を請うたところ、朱書きの後、最後に「コレハイトヨロシキコトナリ猶イクタビモ註シ試ミタマヘカシ」と奨励された(注4)。また同年これまでの自詠歌を集めて歌稿『もゝちとり』を編している。これについては書誌の項で詳しく述べる。

真頼は二二歳頃からは和歌だけでなく物語も著述した。嘉永二（一八四九）年には『宋の世の物語』、『からくにの物語』、『山吹物語』（成立年代不詳）などを執筆している。二五歳の時、『新撰上野国志沿革図説』、翌年『皇国沿革図説』などを精力的に著している。

慶応二（一八六六）年、三八歳の時、師春村が六八歳で病没。春村の遺言により、その学党の後継者となり黒川の家名を継ぐ。翌年家業を捨てて、日本橋小網町に転居し、門人に教授し次第に著名となる。

次に真頼の師である黒川春村について述べる。春村（一七九九―一八六六）は、『国史大辞典』(注5)によると、江戸時代後期の国学者である。寛政一一（一七九九）年江戸浅草の陶器商の家に生まれた。幼名を勘吉と言い、号は薄斎。幼少より学問を好み、狂歌を二代目浅草庵に学んで三代目浅草庵となったが、後に和歌・国学を修めて、江戸の学界で重きをなした。学風は本居宣長の学問の方法を学ぶことが多かったが、復古思想を受け継ぐことは無く、専ら考証を重んじた。狩谷棭斎・伴友信らの影響を受け、厳密な考証学を確立した。また音韻学を得意とした。清水浜臣・岸本由豆流・村田了阿らと交わった。国学者の中で江戸の考証派を代表する一人である。尚『慶長以来国学者史伝』(注6)によると春村は篤実な人柄であったようである。

二

黒川真頼の歌稿である『もゝちとり』の書誌について次に述べる。本書は黒川家旧蔵、昭和二七年ノートルダム清心女子大学蔵となる。装幀は袋綴、料紙は楮、表紙は縹布目。題箋は「もゝちとり」、内題は無い。体裁は縦二八×横一八.二、墨付丁数は四二丁。一面の行数は九～一二行（一一行が多い）。「黒川真頼」「黒川真道」「黒川真前」の蔵書印があり、他に「真頼稿」及び「黒川真頼（丸印）」がある。

本歌稿は題詠で、春・夏・秋・冬・恋・雑の部立によって構

成されている。歌数は、春部九五首、夏部七六首、秋部九八首、冬部七八首、恋部八九首、雑部一一二首で、総歌数五四八首である。成立年代は、「春」と「夏」は記載がなく、「秋」には「嘉永元年八月廿一日夜記」、「冬」には「嘉永元年十月廿三日夜灯火書記」、「恋」には「嘉永元年極月四日」とあり、奥書に「嘉永二年正月六日記」の記述があることから嘉永二（一八四九）年までに成立しており、真頼二一歳までの作品を収めている。

三

本歌稿には一首ごとに、真頼の師黒川春村による朱筆の合点が施されており、「ことによろし」「今すこし」などの評語がみえる。また、詞遣いや句の整い、題意、本意、風体など和歌に関する基本的な指導の書入れがあり、添削による指導も随所にみられる。春部の最後には「百ちとりさへつるこゑそおもしろきさのみならぬもましるものから」と春村の歌が書入れられており、真頼の年譜二〇歳の項に次のように記されている。

又是より先咏みおかれし歌ども集めて翁に見せしかば一覧の後「百千鳥さへづるこゑぞおもしろきさのみならぬもまじるものから」と記して返しぬ。よって此の集を百千鳥と名づけたり。

書名『もゝちとり』は、弟子真頼に対する師春村の激励が伝わってくる歌から名づけられたものと思われる。この歌の本歌は、『古今集』の次の歌である。

百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれどもわれぞふりゆく　（古今集・春上・二八・よみ人しらず）

「百千鳥」は鶯（注7）の意もあるが、この歌では「百千（もも）の鳥」の意で「数多くの鳥」を意味する。春村は「百千鳥」を真頼の数多くの詠草に喩え、意欲に燃えてよんだ真頼の歌を「さへづるこゑ」としている。数多くの歌を「おもしろき」と評価し、弟子に対して期待を寄せたのであろう。

春村は各部立の最後に総評を入れており、夏部には「例なから大かたは優に聞え侍り」、冬部には「大かた捨かたくおほえられはへり」、恋部には「めつらかなるもすくなからて感気ふかく覚え申候」、雑部には「すへてわろしとには侍らねといますこし秀逸あれと思ふこゝろなきにしも侍らす」と記している。

次に『もゝちとり』における春村書入れの評語類についてまとめてみる。評語類は各歌の左側上部及び下部に記されている。そのうち、題意や詞遣いなど、和歌に関する基本的な指導の書入れは主に左側上部に、また、一首の総合的な歌の評価として、

「よろし」「今すこし」などの評語は左側下部に記されている。評価の段階順に評語を分類すると、ことによろし／いとよろし／よろし／よろしくや／今すこし／の順に区別されている。また、最上級の評語として「いみし」「すくれてよろしく聞こゆ」などの評語が稀にみられる。「よろし」と「よろしくや」の区別は「よろし」は良いで、「よろしくや」はまあまあ良いであろう。合点の有無によってもその区別は明らかにされており、「よろし」の歌には合点が施され、「よろしくや」の歌には合点はない。

真頼の年譜によると二〇歳の頃、嘉永元（一八四八）年八月には『新勅撰愚考』を執筆している。前述のとおり本歌稿秋部最後に「嘉永元年八月廿一日夜記」の記述があり、これによって『新勅撰愚考』と『もゝちとり』を同時平行して執筆していたことがわかる。この時期、真頼が創作意欲に燃え、いかに和歌に熱心に励んでいたかが推し量られる。

習学期の真頼がどんな歌をよみ、春村がどのように指導したかを知る上で、貴重な資料であるといえるであろう。

四

習学期における真頼はどのような歌をよんだか。また師の春村はどのように指導しているか、春村が「ことによろし」と評価した歌の中から数首をあげて考察する。また春村はどのように添削をしているか。併せて考察したい。

「ことによろし」と評された歌は次の一三首である。部立別にあげると、春四、夏三、秋二、冬〇、恋二、雑二である。便宜的に番号を付し、春村が添削した歌は春村の添削と記した。題の下方の数字は『清心語文』掲載の拙稿『もゝちとり翻刻』の号数・頁・上下段を示す（一―『清心語文』一二号、二―同一三号、三―同一四号）

霞

①いほはらや田子の浦波音絶て春は霞のたゝぬ日もなし

（一―四〇―下）

花

②黒駒におほするむちもわすられて心は花にのりにけるかな

（一―四三―下）

春村の添削

山路ゆく心は花にのりにけり駒にむちうつこともわすれて

山吹

③吉野川岩波高ききしへにはしろきもましる山ふきの花

（一―四六―下）

山吹

④いにしへのまかきの跡そあはれなるむくらかなかにさける山ふき

（一―四六―下）

春村の添削

野となりし里もまかきの跡見えてむくらかなかにさける山ふき

早苗

⑤夕かけてとるや早苗の露の上に月の影をも植わけにけり

（一―四九―上）

春村の添削

夕かけてとるや早苗の露の上に月の影をも植わたしつゝ

鵜河

⑥夕月のをくらの山の山陰はいるをもまたて夜川たちけり

（一―五〇―下）

春村の添削

夕月夜をくらの山の山陰はいりもいらすも夜川たつらし

蓮

⑦すむ人もなき古寺の池の面にみ草をわけて咲くはちすかな

（一―五一―上）

春村の添削

あれはてし寺のをかへの池の面はみ草をわけてはちす花さく

女郎花

⑧名はいかに家はいつこと立よりていはまくほしき女郎花かな

（二―五九―下）

春村の添削

名をものれ家をものれと立よりてとはまくほしき女郎花かな

駒迎

⑨いさよひの月毛の駒をひく見れは秋も中はゝ早こえにけり

（二―六二―下）

春村の添削

あふ坂や月毛の駒をひきつれて秋も中はをこよひこゆらん

見恋

⑩をくるまのをすのすきかけみてしよりひかれそめぬるわか心かな

（三―四三―下）

名立恋

⑪ものゝふの馬場にいてゝのる駒のたつなくるしき恋もするかな　（三―四五―下）

竹

⑫しけれたゝよのうきふしのかくれかにわかおほしたる窓の呉竹　（三―五三―下）

明智光秀

⑬おもふことなしもはたさて山崎にこるやまかりの名こそをしけれ　（三―五六―上）

次に真頼の歌の特色と春村の指導の方法をみていくことにする。

霞

①いほはらや田子の浦波音絶て春は霞のたゝぬ日もなし　（一―四〇―下）

この歌は『古今集』の

するがなるたごの浦浪たたぬ日はあれども君をこひぬ日はなし　（古今集・恋一・四八九・よみ人しらず）

を本歌としていると思われる。『古今集』の恋の歌を春の歌によみ変え、田子の浦ののどかな春の風景をよんでいる。「田子の浦」は駿河の国の歌枕として知られる。

初句の「いほはら」は、駿河の国の枕詞で「清見潟」とともによみ込まれ、勅撰集に三首みられる（続後撰集・玉葉集は同一歌）。

清見がたうち出てみればいほはらのみほのおきつは浪しづかなり　（続後撰集・羇旅・五九一、玉葉集・雑二・二一一一・前大納言為氏）

真頼の歌は、「いほはら」の波静かなイメージを為氏の歌から受け、『古今集』を本歌とする次の

いまは又たごの浦波うちそへてたたぬ日もなき秋の夕霧　（続拾遺集・雑秋・五八八・中原行実）

行実の歌の波はたたないが「夕霧」はたつという発想を、真頼は春の「霞」がたつに変えてよんでいる。

第三句「音絶て」についてみる。真頼の「田子の浦波」の「音が絶る」という表現は、波がたたない静かな海の様子を表出しているが、それに対応して霞のたたない日はないとよんでいる。「浦波音絶て」という表現は勅撰集、私家集ともに見当たらない。

さらに一首は、母音「a」音の多用によって春の明るい感じが表出され、また同音「た」を繰り返す技巧によって、調子が整い、なだらかな調子の歌となっている。

『古今集』の恋の歌を春の季節によみ変え、「田子の浦波音絶

て」と、波の音さえ絶えている、のどかな春の浦波を表現し、これによって、霞がたつ「田子の浦」の穏やかな春の風景をより効果的によんでいる。調子のよい歌であることからも「ことによろし」と評されたのであろう。

花

②黒駒におほするむちもわすられて心は花にのりにけるかな

（一―四三―下）

春村の添削

山路ゆく心は花にのりにけり駒にむちうつこともわすれて

真頼は、馬に鞭打つことも忘れて花を愛でている心をよんでいる。あまりの花の美しさに心を奪われて、花に夢中になっている状態を「心は花にのる」と表現している。馬に乗っていることと、心が花に乗って一体化していることを掛けて、「こころは花にのりにけるかな」と掛詞の表現としている。師の春村は真頼の歌の上句と下句を逆転し、添削を加え、「ことによろし」と評している。春村は真頼作の下句には添削を加えていない。下句「心は花にのる」は発想が斬新であり、表現も掛詞を用いるなど巧みである。これを評価して「ことによろし」という最高の評語を付したと思われる。

春村の添削で見逃してならないのは、真頼の原作の良さを生かした添削をする方法である。原作の感動の核となっている句や本質を突いた鋭い句には添削を付していない。

山吹

③吉野川岩波高ききしへにはしろきもましる山ふきの花

（一―四三―下）

この歌は『古今集』の

吉野河いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

（古今集・恋一・四七一・紀貫之）

を本歌としている。貫之の恋の歌を、吉野川の岸辺に咲く可憐な山吹の実景としてよみ変えた本歌取である。「吉野川」は大和国の歌枕で、清冽激流の川である。本歌上句は「吉野川」のイメージを使って恋心の激しさを表現している。真頼は、本歌上句の「吉野河いは浪たかく」をそのまま摂取している。「しろきもましる」の「しろき」は吉野川の激流の水しぶきであろう。山吹の黄色と白の対比が鮮やかである。

いはねこすきよ滝河のはやければ波をりかくるきしの山吹

（新古今集・春下・一六〇・権中納言国信）

真頼の歌は川と山吹の取り合わせや情景などが国信の歌と似ている。真頼の念頭にはあるいはこの歌があったかもしれない。しかし真頼の歌の主眼は、吉野川の激流の水しぶきを白い花び

らと見立てたところにある。貫之の本歌は激しい恋心を吉野川の激流によって表現しているが、真頼は岸辺の山吹に急流の水しぶきがかかっているのを、白い花びらとみている。水辺の爽やかさ、山吹の花の可憐な様相、色彩の鮮やかさを印象的に表出している。本歌をよみ変えて、本歌とは全く雰囲気の異なったさわやかで清新な歌となっている。春村はこれらを評価して「ことによろし」と評したと思われる。

山吹

④いにしへのまかきの跡そあはれなるむくらかなかにさける山ふき　（一―四六―下）

春村の添削

野となりし里もまかきの跡見えてむくらかなかにさける山ふき

真頼は次の歌、

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋のの
らなる　（古今集・秋上・二四八・僧正遍昭）

を念頭に置いたと思われる。真頼の歌には荒れた庭の中に山吹を見つけてほっとしたよろこびが感じられる。そこには

故郷花といへる心をよみ侍りける
さざ浪やしがのみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな　（千載集・春上・六六・よみ人しらず）

の歌にみられるような懐旧の情が感じられる。今ここにあるのは荒れた庭の中に咲いている山吹の花である。しかしそこにはかつては昔の人の生活があった。その昔を眼前の風景を見ながらしのんでいる。

次に春村の添削の方法をみてみよう。上句において、荒廃した庭の様相を、真頼は「あはれなる」と感情的に表現している。春村はこれを「野となりし里もまかきの跡見えて」と添削した。「野となりし」によって『伊勢物語』の世界を想起させる。また春村の上句には物語性が感じられる。時の流れの中で人が住まなくなり、庭も荒れ、野となり果てた今、昔に思いを馳せる。

このような「物語性」について、赤羽淑先生は『定家の歌一首』(注8)において、

ふるさとは庭もまがきもこけむして花たち花の花ぞちりける　（拾遺愚草・閑居百首・三二二八）

をあげ、

物語的性格とは、一首中に叙事的要素や時間的経過などを盛り込み、物語的場面や雰囲気を連想させるものである。

と述べておられる。春村がこの歌を添削した時に念頭に置いたのは『伊勢物語』の

野とならば鶉となりて鳴きをらんかりにだにやは君は来ざらむ　（伊勢物語・一二三段）

であろう。

真頼は人間の営みのはかなさと、昔のままの山吹の花を対照的によんでいる。下句「むくらかなかにさける山ふき」は懐旧の情が印象的に表現されている。春村はこれを評価して「ことによろし」としたのであろう。また下句には添削を全く加えていない。原作の句を生かした添削をする春村の姿勢が看て取れる。なお、春村の添削歌における「野となりし」「まかきの跡見えて」の歌語は勅撰集、私家集にその用例がみられない。

早苗

⑤夕かけてとるや早苗の露の上に月の影をも植わけにけり　（一―四九―上）

春村の添削

夕かけてとるや早苗の露の上に月の影をも植わたしつゝ

この歌は、春村も総じて良い歌と評価したのか、添削は結句のみで、「植わけにけり」を「植わたしつゝ」と添削している。夕方田植えの終わった田の情景が目に浮かぶような美しい歌である。「早苗」「露」「月の影」など詞のイメージが爽やかで、一首からは、おおらかさ、伸びやかさが伝わってくる。さらに田の水面には月が映り、月も一緒に田植えをしているという意も加わり、時間の経過・風景ともにスケールの大きい、たけのある歌となっている。夕方から夜にかけての静謐な田園風景をよんでおり、絵画的である。参考までに「早苗」と「植えわたす」をよみ込んだ歌をあげる。

早苗

うゑわたす山田の早苗いまよりや秋まつしづはしづ心なき　（延文百首・二一二五・権大納言藤原忠季）

「植わたす」は伏見院御歌（風雅集・春下・二一六）から用いられ、田植えの終わった田園の様子をうたっている。

名立恋

⑪ものゝふの馬場にいてゝのる駒のたつなくるしき恋もするかな　（三―四五―下）

題「名立恋」は「なたつこい」「なのたつこい」と読む。「名立恋」とは恋の評判が立つことである。「名立恋」をよんだ歌はすでに『古今集』にみえる。

知るといへば枕だにせでねしものをちりならぬなのそらにたつらむ　（古今集・恋三・六七六・伊勢）

この歌は、「枕が恋の秘密を知っている」という当時の俗信を上句によみ込み、下句には掛詞、縁語などの技巧を駆使してい

る。

「塵が空に立つ」ように、恋の噂が立ってしまった戸惑いと恋の苦しさを巧みによんでいる。詞書は無いが、下句から「名立恋」の題とわかる。

「名立恋」が詞書にある歌を次にあげる。勅撰集では『新古今集』の歌

名立恋といふこころをよみ侍りける

なき名のみたつたの山にたつ雲のゆくへもしらぬながめをぞする　（新古今集・恋二・一一三三・権中納言俊忠）

が初出である。ありもしない評判ばかりが立ち、雲のようにあてどもない恋のゆくえを案じ、その嘆きをよんでいる。

次に真頼の歌についてみていく。初句「もの丶ふ」はここでは「武士」の意である。「もの丶ふ」が「武士」の意に解されるようになったのは平安時代以後である（注9）。

第四句「たつなくるしき」についてみる。

しほがまのうらのけぶりもあるものをたつなくるしきみのおもひかな　（続古今集・恋二・一〇八四・正三位知家）

しほたるる身をば思はずこと浦に立つ名苦しき夕けぶりかな　（新拾遺集・恋二・一〇二八・後深草少将内侍）

など多くよまれている。右の二首はいずれも「寄煙恋」と題する歌であり、「評判が立つ」と「煙が立つ」を掛けている。古歌では、恋の葛藤を「塵」・「雲」・「煙」などによって表現しているが、真頼の歌は、恋の噂が立つ「立つ名」と馬の「手綱」を掛けている。馬の手綱さばきが難しいように、恋の噂が立って苦しい思いをしている、という意で、「もの丶ふ」の恋の苦しさをよんでいる。「もの丶ふ」「馬場」は「駒」の縁語である。「もの丶ふ」という詞からは、「戦う勇猛な武士」を想像するが、この表現は、『平家物語』に

たけきもののふ共もみな袖をぞぬらしける（「大納言流罪」）

とあるように、感情を顕わに出さず、感情の動きが少ないイメージがある。このイメージと、真頼の歌における恋する「もの丶ふ」のイメージのギャップが面白い。「立つ名」と馬の「手綱」を掛けてよんだ歌の例を参考までにあげておく。

人なれぬみづのみまきのこまなれや立つなもさらにあらじとぞおもふ　（重之集・二一六）

「立つ名」と馬の「手綱」を掛けてよんだ歌はさほど多くは無いので斬新な発想といえようか。発想が面白いこと、掛詞や縁語の技巧を使って、「もの丶ふ」の恋の苦しさを表現したことを評価して「ことによろし」としたのではなかろうか。春村はこの歌には添削を付していない。

竹

⑫しけれたゝよのうきふしのかくれかにわかおほしたる窓のくれ竹　（三―五三―下）

まず技巧としてあげられるのは、「よ」は竹や葦など節と節との間の部分をいい、「よ」と「世」を掛けている。「うきふし」は「憂き節」で、つらいこと、悲しいことをいう。「ふし」は竹の「節」と「折節」の「節」を掛けている。「よ」と「ふし」は「竹」の縁語で、掛詞や縁語を駆使して、技巧的な歌に仕上げている。

「竹」と「ふし」をよんだ歌は『古今集』の仮名序にある

世にふれば事のはしげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく　（古今集・雑下・九五八・よみ人しらず）

を想起させる。しかし真頼は自分の庭に呉竹を植え、そこを「隠れ家」にしたいという思いをよんでいる。「窓の呉竹」という歌語を用いることによって、漢詩的イメージをかもし出している。

初句「しけれたゝ」は「ひたすら繁っておくれ」と、まっすぐに言い放っている。結句「窓の呉竹」に対する強い呼びかけであり、初句切れの技法が効いている。「しけれたゝ」の用例は少なく、勅撰集には二例あるが、初句に用いられているのは真頼の当該歌のみである。

第三句「かくれかにせむ」についてみる。うき世をのがれて隠れ家を求める歌はすでに『古今集』にみえる。

みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ　（古今集・雑上・九五〇・よみ人しらず）

この歌は吉野の山の彼方に隠れ住む家を求め、この世がつらい時の隠れ家にしたいという思いをよんでいる。『古今集』では、隠遁生活への憧れをよんだ歌が九五〇番から九五六番まで続いている。次に「隠れ家」をよんだ歌をあげる。

いづくをかかくれ家にせんしづかにてすむ山郷のなき世なりせば　（新続古今集・雑中・一八三九・境空上人）

足引きの山のあなたを見てしかなよのうきときのかくれがにせむ　（深養父集・六五）

身のうさのかくれがにせむ山ざとは心ありてぞすむべかりける　（山家集・九一〇、西行法師家集・五四五）

「隠れ家」は憂き世をのがれて心静かに落ち着ける場、つらいことを嘆く場、憂さをはらす場としてよまれている。憂き世をのがれる場所の多くは山であった。

結句「窓の呉竹」についてみる。「呉竹」は呉から伝来した竹の意で「淡竹（はちく）」の異名。『徒然草』（第二百段）には「呉竹は

葉細く、河竹は葉広し」とあり、仁寿殿の方に植えられたとの記述がある。『新葉集』には殊に多く「呉竹」の歌が入集されている。「窓の呉竹」は勅撰集には一〇首みえる。

風わたる窓のくれたけうきふしにさもやすからぬよを歎くかな　（続後拾遺集・一一〇七・雑中・前大納言俊光女）

思ひ入るみ山のさとのしるしとてうき世へだつるまどのくれ竹　（風雅集・雑中・一七七二・後嵯峨院御歌）

この二首も世を逃れ、隠遁生活への憧れを歌にしている。

窓は元来日本建築にはなく、実際に窓が作られたのは室町時代以降である。従って歌人達は漢詩の影響によって観念的に窓の存在を知っているのである。『和漢朗詠集』には、竹と窓を取り合わせた白居易の次の詩がある。

風生竹夜窓間臥　月照松時臺上行
（和漢朗詠集・上・夏夜・一五一・白居易）

白居易のこの詩を典拠とした式子内親王の歌を二首あげる。

みじか夜の窓の呉竹うちなびきほのかにかよふうたゝねの秋　（式子内親王集・三二）

窓ちかき竹の葉すさぶ風の音にいとゝみじかきうたゝねの夢　（新古今集・夏・二五七・式子内親王）

式子内親王は、当時としては新しい漢詩的歌語「窓」を積極的に取り入れてよんでいる。「みじか夜」の歌は「窓の呉竹」の初出である。「風わたる」の歌もこの白居易の漢詩が本説である。また『和漢朗詠集』には「閑居」題で「竹窓」の語句がみえる。

晦跡未抛苔径月、避喧猶臥竹窓風
（和漢朗詠集・下・閑居・六二一・白居易）

「閑居」とは世俗を離れて心静かに暮らすことで、竹林など閑寂な環境での生活である。「隠れ家」は閑居するところである。古人たちは山へ隠遁を求めて行った。しかし、それがかなわない生活では、せめて窓の近くに呉竹を植えて「隠れ家」とし、古人たちの心に倣い、閑居の気持ちを味わおうというのであろう。『古今集』や漢詩を踏まえて、一首を組み立てたところが「ことによろし」と評価されたのではないだろうか。この歌にも添削が施されていない。

五

真頼がよんだ『もゝちとり』の歌について、春村から「ことによろし」と評された歌を取り上げて考察した。真頼は二一歳という若年ながら、これまでにすでに『万葉集』、『古今集』、『新古今集』、『新勅撰集』、『和漢朗詠集』などを学び、和歌の基本、

伝統をおおむね習得していると思われる。また『伊勢物語』や『源氏物語』など、物語についても学んでいると思われる。創作にあたっては、古歌を上手く摂取しており、新古今時代のいわゆる「本歌取」の手法を踏襲しているのではないが、習学期に必要な本歌取の手法を会得しようとしたのであろう。また、修辞としては倒置法、掛詞、縁語などを駆使している。よんだ歌はおおむね平明な歌が多いと思われるが、その詠みぶりからは素直さやおおらかさが感じられる。特に「山吹」題の歌、

　吉野川岩波高ききしへにはしろきもましる山ふきのはな

にみられる、急流の水しぶきを白い花と見立てた斬新な発想の歌や、「早苗」題の歌、

　夕かけてとるや早苗の露の上に月の影をも植わけにけり

の田園風景における、月光と早苗との色のコントラスト、月影の映った田の水面の爽やかさが感じられる感覚的な歌もみられる。また韻律のよい歌として「霞」題の歌、

　いほはらや田子の浦波音絶て春は霞のたゝぬ日もなし

をあげることができる。

　習学期の真頼の歌風の特徴は、古典的な優雅な歌や、斬新な発想の歌、視覚で捉えた鋭い歌があり、古典から学び得た広い視野の中から生まれた、とらわれない、おおらかな歌が多いことである。真頼の歌について、『日本近代文学大辞典』には「歌は大八洲学会（おおやしまがっかい）に加わり旧風」と記されている（注10）。旧風ではあるが真頼は、古典を取り入れつつ、新しい感覚を盛り込んでいる。

　以上考察して来たが、真頼は、古歌や漢詩などの摂取、多数の題詠に挑むなど、和歌を懸命に学んでいこうとする姿勢が窺われる。師の春村は評語、添削などによって懇切丁寧に指導をしている。その際真頼の原作を生かすことが春村の添削の特徴である。真頼の歌は春村の添削を受けてさらに表現に広がりや的確さが加わり、歌の技法を学ぶことによって、習熟度が増していったといえる。これらは、真頼の習学期における一つの和歌の特色を示しているということができよう。

注1　黒川真頼の歌は黒川本『もゝちとり』による。その他の和歌の引用は『新編国歌大観』による。

2　黒川真頼の年譜、天保六年七歳の項に

　此の歳夏の夜、祖母に添寝され始めて和歌をよむ、その歌「夕立やしのをたばねてふる雨にかすかにきこゆ馬方のこゑ」父母これを奇とす

と記されている。

尚、黒川真頼の年譜は、『国学者伝記集成続編』（国本出版社、昭和一〇年一月、『日本人物情報大系』第46巻所収、皓星社、平成一二年七月）による。以下同じ。

3　黒川真頼の年譜、弘化二年一七歳の項に

　此の歳の冬寒夜一ケ月に草野集全部の歌題を咏む、此の頃和歌及其の他の事どもをしば〳〵師春村翁に問ふ。

と記されている。

4　黒川真頼の年譜、嘉永元年二〇歳の項に

　八月新勅撰愚考を撰し、師春村翁に一覧を請ひしかば翁朱書きして注意するところあり、最後に記して曰「コレハイトヨロシキコトナリ猶イクタビモ註シ試ミタマヘカシ」と奨勵せらる。

と記されている。

5　『国史大辞典』（吉川弘文館、平成二年八月）

6　『慶長以来国学者史伝』に

　春村、資性篤実なりき。人に物を依頼せらるゝ時は、残る所なく穿索して、更に自他の別なしといふ。万事真心を以て人に接するが故に、都下の人とは思はれずといふ。

と記されている。（『日本人物情報大系』第43巻所収、皓星社、平成一二年七月）

7　次の歌は、「もゝちどり」を「鶯」としてよんだ本歌稿中の歌であり、春村の書入れがある。

　　鶯　　（一―四〇・下）

　もゝちとり千鳥のなかにさきたちてまつ鶯やはるをつくらむ

書入れ

　もゝちとり千鳥はなはけとあらたまのはるのはつ音はうくひすの声　　逍遥院御詠歟

逍遥院とは三条西実隆であり、「鶯」の作詠は比較的多い。しかし、『国歌大観』及び、私家集『再昌草』・『雪玉集』に当該歌は見当たらなかった。

8　『定家の歌一首』（赤羽淑、桜楓社、昭和五二年八月）

9　『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、平成一一年五月）

10　『日本近代文学大辞典』（講談社、昭和五二年一一月）

尚、大八洲学会は一八八六年に設立され、中心メンバーは国学者たちであった。

（かやま　きみこ／一九六七年卒業）